俳風

柳多留

第七編

へ9
1147
46

46

門へ 9特
帙 1147
巻 46

宗教大学図書

柳樽四十七篇

此編八川柳草葉定
連十余字の意義判
然く庵主の撰を也
ほしく付侍る

はやらぬ色はなし 指南書
こゝぢ絵 一部の冊子
かれることを 著作者が言
文化三ノ春

面白のちがい 伊勢屋番頭 和歌
いちまるくらもの 裏より 市布
芳を刈すて上面五町お来 シノト
を加ゑん者ハ吉トよ笑ヶ耳 砥川
いろは塚 色丼士の子おく 仝
まゝなる色のる 襲より小判 シノト
伝あれば掛あり五あえて去り 雨夕
美白ぐすまけを 裏二朱つけ 砥川
けちを喚又のすのだん世廣 玉寺

屋ゐ物云けつかゝ倉ゝハせろ　孤川
村さ居むしろ彼りをあちかり　ヤマキ
此上の坂をハねへと坂高の色　仝
せきうを一夜よはゝす池の中　御雀

蕾裏評

書キ留て山よ一ッの荒もなし　孤川
弁で疎さ翌る日浪の活花例　巾布
板やさひきかのぐじて立帰り　梅子
侍千ゆりも鶯ひゝく初慶　雨久

簀山評

石仏の侍を石づす鳧の巻　玉章
八幡垣を扨何の雲よ漬あし　青嶽
鳥帽子の錦西かりの色の浮ち穿　仝
歯キをすゝ曲れる浮鏡雲　ミクト
長生ハ無ぐ貴れねたゝちり　青嶽
紫を写る古塔よも沈ゆく狩り　ミクト
三階菱ハ茶菱のあゝしちり　孤川
ゆづゝ如き波濤をにて夜を云る　玉麦

主てはのもとに理発さへ石の和尚
名の言い香一ケ所を焚こめる　シノト
かつらぎで宝合せ子伍子屠揚ゥ　菱裏
かつい鉢およ客就ばらづし　砥川
牧こんで出家なさある　慨　塚　菱裏
糸計をおく手実修法行ゥ　玄蕃
きよかまれてハつんのめる相る玄蕃　砥川
大さうなうしかふれもたる我ん　爾夕
まるは来よかまひすしい　和雀

鉢キ衣を高さ商人を陳上覚　砥川
法を駿で関糸の橋ひぐらん　梨雀
寓加さハ伊ぐ花煙く拡イ　玉喜
日月を塔中へハ打咲原姫　マイタ
態昌さ四角な巴異法宝僧　玉喜
鉢イ和ヘ法おされやと衰なり　シノト
床の名の不二鞠ゥ煙ぐち　巾布
豆ハ教迦牧ハ祢巻の寸子成り　砥川
大社忘びすハ実ゥ使者ですぐ　巾布

一本の矢元より乳母かのきたるつゝみ似合ぬ半かけハ立帝九
州格ハいづかゝ爲さんのまるいち　砧川
さゝ茶の謙の初今つぼんでる　シノヽ
島子さかりよ月、　きく仕舞　舞鶴
けちを通すき内堀日佐て舞る　シノヽ
つれゞまるいを為す文の祝又云イ　マイタ
庫裏だ　あを圓つきゝかてある　如雀
法祈禱より況を文る大沢乘　砧川

えんの京もかゝ筆箱きゝべとく　砧川
子の天宮ぶつゝ拍へきりを考り　仝
西垂のそばて島子をゞ踊して　舞鶴
ゞ家よあゝず島子ハ芋を嗜イ　如雀
床茶のきゞゞく　鄙よ八文字　砧川
圓者きゝこい坊を長拍よし　市布
格別ま芳す云ふんの面舎　シノヽ
日ゞ入りよねりまの里へ亭を考り　舊山

子明　評

毎のまま筆ゞ瓶子ハ冥加ん　市布

清逸宮八十日の夏もあしゝ　玄蕃
飄々の風八三日ばかり吹き　マイ夕
なのゝはいづれ名ゝしい梅雨哉　蓑裏
山手づゝ雨夕
千載へ日かげの揺ちりのこり　仝
紫ハ千和のおもせもで濡ゝ　ヤマキ
い〳〵萩を折く雑かねるまゝ哉　玉章
けびゝゝものむかでゝ小判をおもちゆ　鶴山
中田車呂一すしまし子切キ　ヤマキ

皆同じゝあなすだれで門ト遠ィ　蚊雀
緑なき庭を度の隠ゝ世で笑キ　ヤマキ
昨日迄毎朝ハ立キ霧　科ゝ　シクト
おもしろさひこり来るよのみとの　ヤマキ
ぬかりをへ元既西迄ゝ　雨夕
おいゝゝんまゝられんすとけちま吸　ヤマキ
まゝ茶の清の初金つぐんでる　蚊雀
新道をはやして豪沢でかれる　ヤマキ
筍ハ日ゝすゝゝ折セなとおぶつより　鶴山

梅れさのをちよつとそえよみけて居る　如雀
画を脇よりよむいてるつくね芋　仝
いのいとよ様るよる骨がおれるん　玉章
画ニテよ似合ね半がけハ五帝丸　シノト
猿田彦ちゃんとハ縁を立り鬼　巾布
料理人建長ちゃを酒をえんせ　如雀
丟笑かるかめずおくせず百且敢　巾布
知るねが仏弟くとときてつゝひ　如雀
相よ風風よりづよハ花春ちん　ヤマキ

つ先ちゃれる江んびよ花をゞろん　ヤマキ
ちゃへゞも手味知ふねもつばね　梅雪

マイタ評

武蔵野へ出りの事るはんぎゃうさ　吉嘉
ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美ハ美　ヤマト
間知るねハ少をゞねく徐梅来る　吉嘉
物色ハ寄かつての紋日なり　砥川
ハ美手狗のハハあゞゞね　巾布
糸計を打て丟宴修教ちゃ　吉嘉
門すゞみ天モ　宴よりやすよ　砥川

いちだるくおもひ寄るかたらみ侍
ゑよもあるべし湖ハかすし　味噌
約束をしれかるとえて松浦がさ
子の様就ゑよ入る母の門すみ
いろはまそ爰ハけちなあ
老人の名と秋の月ハすこし
母ちをよく仕たと娘ハ梅をなで
無一ぜんのをシをなるおもしろさ
なけ過をいつく生活ゆくれる

巾布
孫川
箕山
雨夕
巾布
孫川
梅弓
孫川
シイト

娘子ゑ吹りよ月ハ若もなく仕落
落梅をいハこゑいの三合目
等ゑおよび形道もたるハなし
よいホコへ詰おされやこのるれん
線ゑき歳生坂のひゑんセてゆき
海云が表ゑくあると益乳湯
立の首尾よし京間ハ大ゑ尾
ゑ引くこを廣やをは加へり
ことゆの決をなして喰ハ海ち

梅弓
仝
玉寸
シイト
ヤマキ
若裏
玉寸
孫川
箕山

おしろさ一人ぎなよのみこのり　ヤマキ
中田甫品一名よむすこゆき　仝
蘭ゆきするうづ　ちハ梅のゆう　仝
をづかしさ姫国のうへが園よ　砧川
ちうへぐるかゆ　ちつばね　梅香

雨夕評

陸奥紀吳服ゆ　遠く清上覽　素嘉
紙きゝ枝をゆ　人を清上覽　砧川
不侍の侍へを　ちづ　の老　玉章
ゆきかへて山よ　一つの蕊かなし　砧川

評判の儀近江ゆ　名をなり　箕山
栄をゆ　ちゆ　江戸で　シイト
一京ハ絵ゆ　近ゆ　ぶい　ちる　如雲
立ゆ　かつ　ぺ　つける　玉　嘉
陽為　をしれ　ゆ　とゝん　て　松浦浮　砧川
ちゝゆ　へ　ゆ　かゝ　れ　く　風　白さ　箕山
夜の　句で　千代　代へ　名を　の　ヤマキ
清で　詠メて　ハ　梅　ー　の　麦　梅香
蕉の　意義ハ　故　川　つゝ　川　箕山
砧川

つれづれの年ハ男ガ賣りてこは　青露
ものづきかの西亟毋上子ヨ焼き　玉亭
実ハ原まねご作極のいて田地　みな雀
さ〻系の傳の初金つづんでら　仝
一年の矢ぶりよ乳毋ハひき男る　碌川
二三人俤潛の出るてばのあ　巾布
ごさものしてハ除本の風流さ　シノト
一年ガ一トあ〻たつてさしこ　和雀
鞠理人建ちちぶこ湯を入れ　仝

つれづれいとあ方の祝化云イ　マイタ
えちゝ系ちゝ〻んすなゝべちく　碌川
新道を年て系ぶてかる　ヤマキ
子の天賞ぶつさ粒へ屋をやり　碌川
西亟のてばでしあ子をぶ〻て　梅雀
作祈稼へは況を定る大秋乐　碌川
亭芋子や糖を抱てる系る　巾布
ものてるがものつて亟子や要れ　ヤマキ
青露評

御を號で四所の樣ひらくへ　如雲
孝靈よりれて今は城に尼　雨夕
物をいはりかつての級　ほん　孫川
聖人のかつへで射所ひこ書　如雲
鈴記ハ子房韓信ハ諸葛亮　仝
大名の事を程をふやへ羅集　シノト
かつへ沒ぬで宮殿程こづし　孫川
ゐり遠やゐり遠と愛周義級　巾布
ゐる鳥笑ものよつけ女ガ　仝

裝のそで陣法ぶの孟子ぶの　孫川
画ラよ似合ぬ半かげハ五郎丸　シノト
暴いるり樣るよもわねが形ろ　玉手
あをもあり鶯鶯の玉似ずす　鶯山
けいせいよ姫の玉つく作る　玉手
樣田長者と小づまを長屋　巾布
一年ガ一ト月たつとさろ　如雲
ゐよもゆふ妙洞ハかくし体語　孫川
九をやうで岩波より日月ガ三　裝裏

咲も有るもの癒よい利なり　シノト
ヨヅラ如き波濤を越て友を尋　玉章
つれがるるいと面白の祝又いし　マイタ
二三人伏場の所のちばの有　巾布
芋久保と名くばで富士に連り　玉章
崖のそへる樹で赤き毒を掛　水雀
料理人建ちぶと湯を入れ　仝
芋本及彩道もたるひなし　玉章
つ光られる度よ売ハそぐろ　ヤマキ

おかの所ん場ハぐろ　巾布
川越えのちりけで切つてゆる　梅与
妙の手を二手よりつぐ稲　マイタ

如雀評

出給て少よ一ッの荒もなし　砥川
牧とんでお屋敷よある塊塚　摩義
一ッ石ハ橋の中ハ水　梅与
更がいを言ふ事よすると義士ハあ　箕山
蔵紫でも梅子祝又出来ハり　砥川

友の自ぐ千代万代よ名をのと
そてねのもとにみさへ不の術　　掬多
約束よ和をいとも清き成志　　シノト
明香のとまつねでなし名がちがひ　　ヤマキ
花花のうすやつ地蔵のうもさま　　菱裏
誓のぶはよ諭語ぶの重子ぶの　　仝
就ぶて今よりのちハ毎ほし　　砥川
世人の弟ひと秋の身ハすごひ　　志義
手ぶ入られて居ますと右たさ　　砥川
雨夕

ぶつ長で宝合よ伍子居傍よ　　シノト
吉田でもでこでもりぶ小松花　　ヤマキ
小姫が姫月の下夕の森よ成り　　雨夕
寄ぶよぶ姫子のぶら松イ　　箕山
糸計を拾て丟寄使まち　　長義
咲もあるもの濃よ小部なり　　シノト
連れぶるひこ毎ぶの祝又ぶイ　　マイタ
形節ハ揚枝で手まぶ傍手　　砥川
拾坂来度げて拾のぶを立ち　　マイタ

ほく高かく〳〵てもかりとそよ吹て
暁キハ丘陽ヘもつる秋の春
南ゝ茄子や橋をたいてる茶を
へゞ物をけつかふ蓮こらふハせの
まゞかれぶろゝと蛇の青俵て来
捨ものゝ男は沙ゝんの灰やゞり
豆かゞり土器煮すりちがひ

ヤマキ評

数千代を取ゞ踊ゝまく浮産ホ
茅かのもろゝむも夏の名ホゝ

雨夕
砥川
巾布
砥川
仝
シノト
砥川
砥川
蓬裏

千載へ日後の桜ちりのとり
紫翠ハ仏と影よまうせられ
百〳〵と豆腐やをちかつり
さまの板しゝきた物を歌よやり
陸在世ゝ系ゝゝハ屑なり
ホホよしきめこーき武ホ一瑞
秋やさむきホのゝとてたちかり
浮刑の儀逆江と雲及なり
鉢ゝり今ゝり塚ハかゝるあはじ

雨夕
吉露
砥川
蓬山
シノト
巾布
梅毛
蓬山
吉露

恵の意味ハ英川 梅川　栄川
かつい迄ハ宿新嫁ゑび　仝
第一ぜんの色ゑとなる面白さ　仝
下戸の子ハ上戸つぶれ大江山　雨夕
きう茶の情の初舟つぐんでる　水花
つれが見ないと母ゑのおやぢ云イ　マイタ
一ケの矢ゑさらでハあきたてる　栄川
子のいつまぶつく拉へ屁をやり　仝
元吉原もかつ蒲萄なくべとく　仝

小婦の頃で牧ゑをあくすする　鶴山
老人迄ゑやうく三合月　三嘉
いつぢきかの豆腐ゑ子ハ焚ちゐ　玉来
婦婦てかせぐで就ハ遊んでる　梅与
天ゑ赤きくゑのようけてなカ云イ　市布
今祢の方かつけちなゑを云ふ　シノト
むよもいつふね洞ハかつし味噌　栄川
ゑ茄子や糠をだいてる茶ゑり　市布
ゑふぢ口ゑれても赤ゑ焼つぎや　梅与

四月やでかつきまる　彼の大川　マイタ

梅毛評

苔茶へ千代の九九しを御近新　砥川
松の岡ハいづれを文の御席へ　雨夕
楽人ハ上ゝ下モですむ桃の御所　蔦裏
八重垣を打向の中ゝ御ゝ人　玄蕊
右衣と言徳茶ゝ名をちぐ九　玉ま
茶をまるち梅ゝも江戸でおり　シノイト
梅ハつゝりの文らへ内詠方　雨夕
三浦やへ塩かれくゝもしろさ　ヤマキ

あ庵の紅葉業平一首詠ゝ　青蕊
二ゝ云ちい言庵ゝ君子とまるゝ　マイタ
門の篠しるがへるゝ祈ゝ　蒼山
血遊ゝの実ハかゝ茶ゝ一塩　シノイト
立ゝ安かつぺゝつける赤茶　砥川
ごさゝのゝゝしてハ詠ゝ木の風流さ　シノイト
つれゝゝの外ハ男ゝ愛りゝこね　玄蕊
治達ゝ言ゝをいゝ言ゝる法印茂去　ヤマキ
三位ゝりの名句毎こんゝと詠り　砥川

至りをかぞへるやうよはハらし　マイダ
風うよ似合ぬ米がけハ立帛丸　シノト
きよを落まれてハ人のめる相る云楽　碓川
京こ江戸かつぎの場大ちぶし　菱義
百人が目でいさよ源むゑの舟　マイダ
紙童ハ多りかつてその紋日こ　碓川
出人迄ハやうぐ三合月　青義
まぐられぶろと蛇の着信て来る　碓川
皆同じ事ぢで門ちがひ　松庵

画を彫る事ゆむいてる山ノ芋　松庵
つれがるいとあまの紋又ハ　マイダ
おもろくの中へ変物同を笑ー　玉素
ちよんの百ハ地下をうゝやむ鯉稽　雨夕

シクト評

長生ハ金で黄れぬ宝ちり　青義
年寿丸へ出産の事る鯰昌さ　仝
拵ふ遊を又ひろいいかん浮橋な　碓川
松作り度を下々同こ出高至交ち　菱裏

約束メを以れ[illegible]と尺て松海浜　　箕山
伯の江ト海五の中へ男波くち　　玉寺
大名が乗あれさも法遊ちり　　ヤマキ
寄くしまぐり結子蟹ちゝい　　箕山
拙紙い[illegible]すぐそれも法キ　　砺川
京江戸へ白ゆが拵るの揚ちり　　物産
三浦やへ法かれゆくおもしろさ　　ヤマキ
千石ハ変れて居まもなほさ　　雨夕
ちづかしゝとも深で首をつれる　　マイタメ

吉田でもてこでもゆうゆ小枝衣　　ヤマキ
ついつい海ちよもろねが拵れ到　　玉寺
子のいつまぶつさ拉へ屁をやり　　砺川
笑ハなぶねも作法のいて田池　　物産
迷ひ子れついてなよ人ぶかり　　市布
働ぐ縁メて抜しの変でなし　　箕山
作城の海かつむけるも男　　菱裏
小豆の西豆拙上手みたきゆひ　　玉寺
巷人迎ぶよやゝぐ三合目　　吉霧

鶴が丁今より婦子ハ好うあまじ　玉章
茅末および鶴遠もたすなし　磯川
きてよをふまれていうんのめられる天島　マイタ
つれづるるへこあすの鶴又云イ　加茂
風を彫るのうよむいそる山の芋　雨夕
小姑が貶用の不メの海よ成り　仝
ぎやえれハ隔居の高厚を　ヤマキ
ひしうんまるれんすをけちなる
磯川評

所具足ハ夷を存ヒよるるだ好　シノト
右在遠方でえんでも所老年　玉章
松ノ間ハいづれを夏の所庵ん　雨夕
名の与氏看一ケちを樊こゆる　菱裏
世新ふね山をゆづね徐海来る　青霧
夜の月で千代よろ世代よ名をのこ　梅与
一京ハ新文遠もしぐしてる　加茂
遠キを拾てまがれるを四郎光　シノト
聖作上のふね乗名が高ハ好ゆ　マイタ

横笛の老をし大へ来て出来　玉章
七ッ宝せ〳〵こん〳〵のを用ひさし　マイタ
聖人の如くにて紛御けいこする　水雀
昌平の御ゝぶを問田とハいうよ　仝
昌吟で英気いでく源三位　仝
うらうかさ流れ紛る連ゞ出来　仝
夏雪をかぶへるやうに松ハ小べ　マイタ
楽（がく）人ハ上を下もで瀬橋の御所　菱屋
紀家ハ竹ゝすゝ為子等を食し　水雀

お姿の若ハとまりけバ三筋町　ヤマキ
素足を乗を行かせハ文高　玉章
竹久保と高ゝで乗足へかゝ　ニ人
海きゝちかゝず紀久ハ言尾く　仝
月を寄し為子ハ問を聞まする　仝
でさあよしてハ諸本の風流さ　仝
柳原大納言けゝる下を蘭　梅鳥
茅束及び彩造もたゝしを　玉章
あよ為ゝさせて文入を拾ひ　雨夕

杉子面ラ屋根ニ成をそりつける　梅ヶ
金ン神のすかりけちを紙をそり　シノヽト
実ハ孕ミねご作極　れしい田地　如雀

市布　評

所見見ハ夷と夏をよろこる沙り　シノヽト
附知ラぬ山をたづねて篠梅来る　青鷺
樹数でいけ系なかをる夏の月　マイタ
老尼のくすをハ歯のうハさなり　菱表
云わ〳〵と城をなが見る一島中　ヤマキ
大名ゞメあれも　海遊ん　仝

即吟で夏系を業ハ源二位　如雀
業平をえんのかゝまする大　社　青鷺
海ちをよくちを婦ハ梅をぶき　梅ヶ
ちゆ中ハ家ハてごさハもとゝ　マノタ
つ紫ちられるたびハ秋ハをぶつこ　ヤマキ
ちれゞるとしとあ方の紅又シイ　マイタ
つらよ似合ね手かゞけハ光　シノヽト
ハぶき合すひとなりあす合梅名　マイタ
あ〜ゞとゝ屋で春花ハ(ゆ)り　玉青

よい和へうけあれやとのられん　シクト
風を形よるもいそる山の芋　如雀
嵐なきするたゞあハ梅のゆう　ヤマキ
五枚かゞとの結をメる二月碎　玉章
なゞ朝云けつめく望をゝハせの　碓川
主をの知ひと秋の月ハすゞし　仝
あよ海ちさせて大入を拓てある　雨夕
金沢の方ゝけちを姫をゝり　シクト
旅の海ちおを以よとまたんとゝのり　主章

いをんゞやアなどゝやとびの声よび　ヤマキ
松子づゝ兎角で海をゝりつける　梅ち
すつぺりとすハをて点をていつきなんす　碓川
梅よ風風よゝぎよハ花ゝ　ヤマキ
ゝまゝの下ハ此りのおもこの　マイメ
おもゝくの中ハへ変物目をよほ　玉章

玉章評

万武の立ちる蔭ハ大樹なり　シクト
弁霊ハ王をと成て蘭行を移り　仝
三ゞい義ハ花義のあゝしん　碓川

即時で天竜を芽ふき源三位　如雀
殺犬産横犬の礼より一変して　仝
本のまいづれ名高き梅やしき　蓼嘉
一京ハ殺生近もひぐい　てくる　如雀
さうまの板ひぐきを敬まり　異山
どさうのさしてハ海苔の風流さ　ミクト
今ものて亜宗毋の蓮ともらへ　仝
笑ハはぐまねで作徳のい田地　如雀
千鳥ハられて海苔を赤ふさ　雨夕

つれがとらいと毎方の祝又て　マイタ
京と江戸かつぎの海大ちぶし　蓼裏
思花の情の初金つげんてる　如雀
押領侵業ハ汁の実まきハつけ　巾布
なる世来ハかまびすしいて　如雀
ぶまもあふぬ洞ハかくし嬢　砥川
拙祝ハ吹りすどてられもなき　仝
祝をしてと笑まも高好出のこし　蓼裏
蔦なきするぐあハ梅のゆ　ヤマキ

血逆上の実ハ本来ヲ一地　シノト
治達ヲ物を[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ法[illegible]　ヤマキ
至ハ釈迦牟尼ハ神農ヲ代ラン　磯川
地の字を二字ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]　マイタ
門すゞみヲモウ家ヲ居やすヲ　磯川
賢をヲ[illegible]ヲ法方をいれラン　梅ヲ
ヲくまれる不安ハ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]　マイタ
嗜い色きてかつ[illegible]ヲ[illegible]ヲ大ギイト　蓼裏
かこい者ヲこい坊ヲだんなヲ[illegible]　巾布

文日堂評

月の場を十三町で分ケたゞめ　梅ヲ
日月を背中へ入れる咲形姫　マイタ
江ハ地こちつて陸井を[illegible]　雨夕
紫ハ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]　マイタ
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ入本ヲ　巾布
北ハ池南ハ海へひゞくなり　如雀
[illegible]ハ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]　蓼ヲ
蓋を刈すてゝ上面五町あ来　シノト

少きころ　後河内
大イきなる藻かぶれもたゝ我こ　如花
かゝらぬまで宝合せよ仕子番傳ナ　雨夕
きゝ京ハ変れていきすこたゝ見さ　シノト
京江戸へ自ゆゞ抜るのさゝこ　雨夕
吉田でもてこでもいろゐ小袖衣　雀
よい和へ達おされやトあハれこ　ヤマキ
ゑ庭の紅葉業平一ゞ藻を　シノト
三ゝゝや〳〵鴨かられ切かりろさ　玄蕎
　　ヤマキ

「れが見るひとあゝの祝化て　マイタ
一ゝが一トゝゝろきしゝこ　世花
見ま〳〵ハ優濃夷あている二十切　仝
いもんどやアなどやといの考よび　ヤマキ
廿七ゝゝ見銭をくふゝゝき　蕎麦
五合でゝゝいけねへと屋士図表　梅多
なげこゝも云て生ケ差ゝろぶれる　シノト
つげのゝゝいでゝがきこすゝる　マイタ
ゝ指のよゝ差小西　役　目なり　ヤマキ

東花子や精をだしる茶の湯　巾布
村芝居むしろ敷をあつちこち　ヤマキ
拾ふいしがお蒲團ゑらひ　箕山
歯のたつて袴でちる業よ　柳　如雀
鍋ぶが抜けくあるこ益湯　蓑義
おまへそむぬのふハあぶくだね　巾布
こゑひゆ灰をきして焼ハるす　箕山
信あれバ徳あり五毎元て去り　雨夕
ピッ用やでおかさまさる彼、大河　メイ夕

川柳評

不侍の侍へを嘗す虎の老　玉壽
ぶ下りも拾ふ屋く初　雨夕
秋　昊ハ王まと放て角行を乗り　ミクト
越ゑも人をもおろ仏入ホ屋　巾布
尿吟で英京を葉ふ源三位　如雀
ま京ハ黄れて居ますと広さ　雨夕
たをやうで荒波よりも同ハ　蓑義
寄ゑよ計って海ゑ子をちぢ松ひ　箕山

カイガウ
甲香のさかづきねでなし名が遠白
ふらくと豆腐やをちかへり　蕉嵐
ちやうくも来ねる拍子トテ田楽ゝ　砧川
はい祈祷へは説をまぜる大神楽　蕉嵐
島子盛りよ月ハこまなきつを仕舞　砧川
料理人建出ちつも酒をえらせ　蕉嵐
庫裏ぢくアお開つきよ敬てある　如雲
鉢がつり今よりのちハかりあほじ　仝
クワ
火灌布ハかりて来テ火へくべる　素嵐
蕉嵐

井くと紙ふねが仏こきつゝ以　如雲
いくせ生ちの生のかまひさし　仝
ぢんぶ飛ばふねみりの変ぶ打テ　素嵐
想茶のとちりの初舎つぐぐる　如雲
つげのせろいですがきこすつる　マイタ
市芋子や猫をだいてる素ゑり　巾布
ほぼおよぐんけつかふ逢こふハせろ　砧川
拍かゝひこれもつんがよ近イん　如雲
丟笑ゝかめずすくせず百姓　巾布

どさあまりてハ浴衣の風流さ　シノト
新道をなやしてたいこさかるる　ヤマキ
あ一　ぶやくれバ信仰の高尾さ　雨夕
村芝居むしろやぶりをきつらう　ヤマキ
つとの袖笠を嗅ひでいるけち蟬　砥川
あの男よかぎりてハトぐかてい者　ヤマキ
味ひぐも手味ナ新ぬもつぼね　抜屯
ふくまれさ下ぬ過りさ〻るれる　マイタ
もより大イなるハ庄勅使ちナ　シノト

シノト評

秋の田の穂よハねれぬ人もなし　マイタ
ちんぎりさかもたまふず逆てゆき　ヤマキ
高ちゃ廉ハ紅葉かふうへこなり　水雀
法日よ紅ちぶ新て詩を見せ　砥川
終廉山歌も味ふすも雲のうへ　市布
びんがうを去去ふやひ高北山　里松
乗ものでまてなくぬ五十ぬん　市布
月揚りの日ハなきノ父へを変へをの　砥川

よくはんの豆よりハ炭の火よりつ　マイタ
扱よりはれなぐる筆ぐ煙んで形る　孫川
已なる重よりハ目あさい印なる金　里松
神代よりだますハ海とかなり　玄蕉
ぢやくるよりねられ玉番ざへごん　如雀
雷りよ布袋ゑんどうろうへる　孫川
日板彩色みおこたぶす塩魚作り　玄蕉
山よ星魚子ハ月で大不毛尾　ヤマキ
なぜ色をつくとハ光ぢられず　孫川

あなんすなよりあとハ拾云茶ん　巾布
あスをうせたつちの切レを掃へけ　マイタ
尺る宛へおとすか判の面白さ　仝
出し帯ざんすをたぐる二合目　孫川

文日堂評

茶物で茶まくなくねは五十年　巾布
物年よ七千あが字をおぐへ　雨夕
流あ弟で千代茶代へれまつ　仝
乙公ゞ出ハ行くこくちり　如雀

筆えで五葉を芽吹あげる　玉露
名所をだ訪ずゆ西で行ぐつけ　如雪
外よりのぞかハ充安の松の風　ヤマキ
紙入を投打ちさむ三ッぶん　玉露
ぶらられないよ手あげるひごいる　玉章
風風の梅すきき在よよの〜ず　巾布
五中八八文ちでこ三歩なり　雨夕
大九のりすがき以い在　シイト
一ッ泉の月ふかさを絵ちやと　如雪

笑拝を婦天麿さん放されて　マイタ
入墨がのるで乗よめ〜ちゃ　玉露
油ちしがまぐ有ると寒ん　箕山
安屋を女ふかけさる公安の下女　菱裏
ぐ河が知へで俳諧常をとき　ヤマキ
三三会ん人ちこけつをひんまら　巾布
又晴よりぐ〜れるぶと散々　マイタ
已成る金よりめてちハ印なる金　里松

川柳評

御答意今も私のものゞ
ちんぢゝさ風もはのてね茶浮
絵のにすでさ一家ゝてねもと
ゝ玉の祢はあゞせもひとり
祢遊よりまます八酒とかなり
みのっさとさぶ十寸稜のすゝき
三韓の耳へ日本の手がを八
系平ゞつゝしねくハと一系中
おもひかねいもりけて二安下り

ミノト
徳川
箕山
玉寺
ます
如意
マイメ
青系
巾布

門トすゝきれみをにより九寸より
六月の第日祢をしゝきゝひ
田今赤湯をもむにへとりてはぎ
入鞍ハ一トゝ三四で板をゝち
入鞍ハ居外ゝるどあつゝまれ
掛板を曲線よすゝあスすみ
ゝ系寸を四の戸掛が嗅ゝられず
如意の傳をしてはくでゝ寸を
古鞍へ又おつゝめゝゝ麻てい寸

型寸
巾布
型寸
ヤマキ
巾布
マイメ
ます
ヤマキ
型寸

玉章評

御ひさぐハ部ゝね浮代さまの
メ五の後ヲ以戸毋ゝへ名を記
姫名言葉を誌よ付て敬ひ申し
稽ぎりで毒上初（シャウドウ）のさたも是
横のゝ名面メかゝも二人り事
傷でもないとしづゝも四ゝ
毋祝のをハとまゝね蝶や茶
兄毒かゝ屋をもちハ毒ゝり

砧川　如雀
如雀　蓑蟲
仝　仝
仝　マイメ
シノト　シノト

二千人余三日ゝで埋メられる
姉ゝ火ゝゝしてすこゝ嶮をせき
幸加悠ひづゝいのハゝ毒を伝
河ゝずゝいへゝ海ゝハをかゝゝ
絶ものも難程も捨て礼まある
こゝゝゝだ誠ゝやゝ者の毋
仲人へかゝくも姫まゝまつ部子
茶稽やみゝゝゝやゝ下話をはゝれ
板のゝゝゝゝ不二ハゝれ咲てハ稽
あスゝゝゝたゝちの切を極へゝけ

如雀　如雀
蓑山　玉章
シノト　マイメ
砧川
シノト
仝
市布

文海ハやハら郭巨よりおもるべき　シノト
る廉むすこ相メのある下世至まい　里松
即吟歌・涼・御板・思ふ・八幡・ぼう亭ゑ

川柳評

れんかんの中を思ふのかよい舟　シノト
板川舟のポシも嘶るまぎり　碌川
坂をのせて波よまるいて涼ミ　仝
加茂川へねけかくの梅ヲ流スゑ　玉亭
海更ふ御で幾ハ志ろれてる　碌川
秋の田のようぽと泛みも板川　青龍

一斤のゆ今かげろうあるのゑ　マイタ
けちを喰ゑ乙年をすまうんぶり　青龍
酒やの酒ひ北へ今も又生ウーブ　碌川
ヤていハんませうこいあできぬ仝　シノト
ぜいきの亭ゑ鑑屍（サイジリ）まゑれてる　碌川
乳世ひの形ひてかつゑる夫婦　仝
ものの付さ下世よ世府八月を付る　里松
長つぐねるの亭うなぶ斗でゐ来　仝

文日堂評

笠の後江戸中へ名をあらし
半紙よりできてあるゝさきさ　如雀
毎月よりて歌の吹ちらせ也　雨夕
宝暦（三田八六）をかけて知ル　仝
代替りして再縁をする子　親名　春露
おとゝろさ俤りの有りをいつまで　雨夕
春宗ハ旭ハ川柳ちの活説　仝
春一歩ハ春平をひく伸の所　如雀
一斤の初舟如けるふるの自　玉亭
マイタ

あとあ屋用よりかけてかゝへきん　如雀
花毎時ちる屋ちハ春なり　シイト
河つ地を作ふびは姫のぶんをげ　春露
芋などのつくさて有る安玉関　如雀
蕪　かぶり春ぶ様ている恋稽古　玉亭
おつらぶせられそんへて句合　シイト
ふせ紙で小俳へひさし六部かけ　マイタ
川柳評
毎月よりて吹ちらす也是也　雨夕

雑ぎりで毒上新ハ海苔もなし　如雀
附句なし雑式へはなかつは　麦青
相もふを帰ふおくへあつてにげ　マイタ
一ツ餘て大津絵を問へはり　雨夕
遣り酒やふ切炙りしきかを賣　如雀
一斤の初金かげろふの月　マイタ
巴屋半こつをうとある茶釜幾　砕川
酒やの通ひ松へども又ちらじ　仝
寒夜寒ハのハれ今宵の秋もたち　仝

相を拒蕃べとながい銭づゝへ　如雀
かれ色を他まるゆを老て嬶子ある　砕川
げい者の寿を賽屋よ志かれてる　仝
嬶子の巫宝さかつてかづつきり　仝
志ろて考れば如庵が俳く　仝
乳黄ひの醒ひてかへる家更婦　仝

即吟

つれ〳〵を　係　石川
お茶士　げい者の信

川柳評

御雲をバ三歩でヨウ祈ると　吉嶋
嶋くとなりてゝん也ゝもかりこと　仝
雨ふつて傷ささるく伸の町　里松
モハ新ゞ家田あ金なとさやれ　ヤマキ
かんゞゝこと　なりし尼なのしろ雨　如雀
つれくよ雑ハ冷あを紀ハ嶋へ　玉亭
多使ハなをふつて志かゝれる　学子
不川で家のたゞこの香のうさ　巾布

笠雨の海　吉ちゝ　平ちゝ　如雀
ずし井や井やこ林泊と切つぎ　玉亭
九ちを八かゝろぎ　なこをふこつぶ　ヤマキ
傷を八ゝしろかゝるけちをふ　巾布
かゝけをなげるまつまでげい春の　仝
根徒のゞちでるをしくあげい春　マイ久
亭ゝを尼ゝ家狀父を尼ゝつれ　玉亭

シリト詠

大自在天笑ふ筆の穂を孫
たのもしと夜やうすく透通り　里松
その名も人の知るかるる所と　青嵐
子を抱て見るくるへる山と海　里松
相よ笑ふて菜畑の一畝中　マイタ
揺ちる下々は蕾揺るしおけ　孫川
茶の色ハうつり移てそをハく　如雀
き人たんれいうしかるられ　揺ち
　　　　　　　　　　　　　　松雀

仲秋八留で迷子をたづねあし　孫川
こ味せんをうつすま浮うしとき　巾布
ぐらは入る門を五町のはへうて　里松
袖のうへうをを見る西垂さ　雨夕
名代をうさ氣で居る柳下垂　孫川
りのこを八葉酒ぶさ云後の月　雨夕
茂づるの見る池で揺てしる　青嵐
十五夜ものぐさ家ん学者ん　孫川
沈文でかきね蓮を見でかり　里松

うなされる仏城狐よ身がわり　ヤマキ
こむ〳〵ふまなんでやつれをよみんず。　如雀
中者のかくつなぎけて猫をえんせ　ヤマキ
あげん寺うなておつこちさ〳〵よ拾　素嶺
仏城のたんす山吹の土蔵ちり　如雀
ぐ〳〵和尚ちを賞木がくんよ〳〵　マイタ
色恋〳〵後ハち〳〵ねぐ形なり　玉寿
人こそ知ふねかるくるも猫ハなし　芳裏
うら一本おやまよ水ら拾の面白さ　保川

雨夕詠

うつ〳〵ふらがけら波の秋高浦　マイタ
秋ほうまみをつけら四高走　保川
須流茶碗も碍〳〵ず下弦茶碗　如雀
大しなな蒲公英色〳〵色い　保川
ゾ良の老ハ書ちつまへよお来　ヤマト
面白さ花月気塵の仲の町　保川
ぎよんな代筆ま菓好こつかまり　仝
志かこハえへ母さしを夜でを徹よく　仝
海でハ中やたへなん拾夏ふとん　シリイト

秋きりはとさやうよりあるる九月廿
修学の相ハ八組まへよりあれ　孫川
手紙をてうなぎがいやよりなり　ヤマキ
母者ハ一人り島子の名でふなし　孫川
こみせんできけバ孫ハねむくなし　マイ又
十五歳ものさこまえ浮者ん　里松
あげんとうなぎおつこちそう　孫川
よつこりこ矣系形をしねる虎　孫川
松のきぞくをつかまて一歩ゆ　シイト

十五町程ゑるうちよりけをうち　玉来
いつかつく帝だと姓ぞくあるイ　マイ又
子のつまちよいとおく知ねう　孫川
手紙を志いく安原て様て清り　手之
中者のかつあちぞけて孫をえん　ヤマキ
ふんぞーで洗子をつるすけちなやつ　孫川
そてねやつ尻へおつあ者れる　里松
だんりよ矣ちと堀ぎりちギチ　孫川

文日堂評

加賀殿へ梅の枝拔つけたゞ見
二ツ法イ西寺所他も三千個
城をぞんとかつぐ一トやーき
定家江戸五月雨の身もへれ
夕夏の老ハ苔ちりまへよあ東
当の名も人の色もかとる　ホュ
夏の日ハ波ちよへありや夜
袖のうへかゝ拔色ゝ　この　色よ
吟子夏紅ぎれて傷者こゝろ

雨夕
玉寺
里松
ホ雀
ヤマキ
里松
シクト
雨夕
夢裏

かぞへれハ島子ハ生ふ宮中へ
姉ゝ鶴の灯ようこんを入るあぶかり
ひゝうこ手ゝつゝいつを行世ゝ
らにの志をにのとなまかゝ女ゝ高去
如川ゝかひろよ千ゝ鶴ハまつゝ
三味ゝ人できけハ姑ゝねむくなし
縁組ゝ手りゝゝゝひハあきのかゝ
切れ復縁今ハ紅をつゝむべき
十五町程ゝる間よひけをゝち

今ト
マイ夕
仝
ホ雀
梅ゝ
里松
仝
雨夕
玉寺

御仕合ひやく出る切おとし　ヤマキ

借金を山伏でおつて置ます　仝

大人のおせんべいちよくれしつけ　如花

どなさかれおいますかときく大一座　マイ文

又きつよふではなしけちな和合え　雨夕

さてねやつ屁へおつ付だかられる　里松

白酒白といふべきを蒼白酒　玉章

表母への唐緑山が仕たし込る　如花

川柳評

気性ますぐれ大キナ日のおこし　孫川

道業ハ残かえの背まとびへる　菱裏

恐悦さ僧人別の盛りがたち　マイ文

おい川でおく留てとおなぐさみ　春露

家孫ハもく出ますトうるい謙　仝

名将を茶やそ宵のあまそう　マイ文

面白さ茶君笑語の仲之町　孫川

かざられば息子も寺市と　シクト

細をつる道楽がのできぬ妻　春露

首一ツ九十九眼でみつけ　孫川

三月末ゟ第八よりまず仕舞之
第八月朔日ハ雨天ニ深メさせ
九十九日うるくと亜梅を
きれ板敷今ハ何をゞつくひべき
夜づるの長見油でひげて形る
屏をきぶれて手塩ハ水ゑ場
徙人でかさぬ蓮でよみでかす
不変ふ弟ょをがいちるかハ塩ゑ
のちれ身吉京でんちつけのゞを

蓮裏
深川
里松
雨夕
吉嘉
仝
里松
仝
ミヲ

若の塩されをもを五九十五
ちゆゝしょ何のゞやつれをよみんを
二十四日注歌ょ仰ちゞあ
祝ちをいきゞゞらす大ち麻幸を
村昭八舞ハるゞつとにをちり
湯をのんで徒命九ょ仕て仕舞
亜原の如合あまねくに和猶れ

深川
水宜
深川
仝
玉幸
深川
仝

能風書屋於毎四十七人角法里